

インフラ維持管理の重要性を再認識

県コンクリート診断士会技術セミナー

東工大 大学院 二羽淳一郎教授が講演

笹子トンネル事故から学ぶ

福井県コンクリート診断士会（石川裕夏会長）が主催するコンクリート診断技術セミナーが2月29日、福井市手寄のアオッサで開か



二羽淳一郎氏

加者は悲惨な事故を繰り返さないためにも、インフラ構造物の維持管理の重要性を再認識した。

同セミナー

（共催／県建設技術公社）は、

会員以外にも聴講

できるオープン

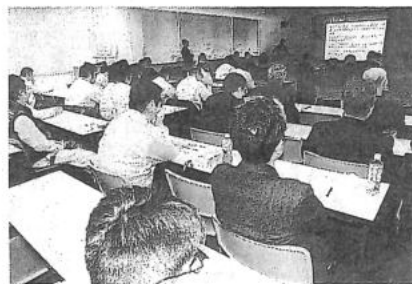
形式で、コンク

リート構造物の

維持管理をとも

に考えようとい

う企画。会員や



約120人が受講したセミナー

他県のメンバーほか、一般も合わせ約120人が受講した。

二羽氏は土木学会副

会長、日本コンクリ

ト工学会副会長、プレ

ストレストコンクリ

ト工学会会長、土木学

会コンクリート委員会

委員長などを歴任。笹

子トンネルの天井板崩

落事故に関する調査・

検討委員会の委員も務

めた。金沢市出身。

冒頭、石川会長は国

交省の民間資格登録制

度においてコンクリ

ト診断士の登録範囲が

大幅に拡大されたこと

を受け、「国のコンク

リート診断士に対する

評価が高まっている」と

と使命感を抱き挨拶。

続けて、「笹子トン

ネルの事故では9人の

尊い命が失われ、イン

フラ構造物の維持管理

が喫緊の課題であるこ

とが浮き彫りとなっ

た。メンテナンスは待

ったなしの状況にあ

り、今日は二羽先生か

ら幅広いアドバイスを

受けた」と今セミナー

の意義を訴えた。

二羽氏はまず、笹子

トンネル天井板落下事

故の検証結果について

解説。天井板は長さ6

mのCT鋼で支持さ

れ、トンネル天頂部と

は16本の接着系アンカ

ーボルトで接合されて

いたが、アンカーボ

ルトの配置が左右非対称

だったと説明。事故後

の引抜試験では、接着

剤の付着長が短いもの

や、規定の設計引張力

に満たないものも確

認。維持管理の状況で

ルトは事故発生までの

12年間、近接目視およ

び打音検査が未実施だ

ったとした。事故を踏

まえた維持管理のあり

方については、適切な

点検や記録の保全、以

後の維持管理への反映

などが重要とした。

その後、従来型のコ

ンクリート構造物に変

化を加えたフロンテ

ア材料として、UFC

（超高強度繊維補強コ

ンクリート）やプレキ

ヤスト化について説

明。その特長や国内外

における施工事例など

を紹介した。

二羽氏はまとめて、

コンクリートの耐久性

に関する定量的評価を

可能とすることで、よ

り社会インフラの長寿

命化に資するとし、国

民の安全安心のために

も、着実に維持管理作

業を進めていくべきと

改めて主張した。